

教育は若者の「自分探しの旅」を支援（1996年中教審）し、彼らのアイデンティティ（自己同一性）の確立をめざす。しかし、浅野氏は、自らの青少年研究会の調査データ等に基づき、状況に応じて変化する「多元的自己」の拡大の事実を示す。その上で、これを従来の知見のよう問題視するのではなく、多元的自己であっても、より生きやすい生き方や社会のために生かすことこそ重要という。

「ゆとり教育」でいわれる「個性」については、学力低下批判の嵐に出合い、成績の良い子は「能力を徹底的に磨くこと」、良くない子は「成績競争から降りること」の二重の意味を持つようになったと浅野氏は指摘する。その上で、「自己の多元化は、一つの個性への過度の依存によるリスクを低減させる」と、両方の若者に手を差し伸べようとする。

評者も、生徒の現在の個性を狭く固定的に捉えるとしたら、



### 「若者」とは誰か アイデンティティの30年

浅野智彦 著  
1575円 河出書房新社  
03-3404-1201

教師にも生徒にもよくないと考える。こぢんまりとまとまってしまうのでは、望ましい統合とは呼べないだろう。たかさんの個性の「かけら」は、多様な状況において、多様な箇所を光らせたらし、成長させていきたい。

また、生徒に友達感覚で接してもらおうとする教師がいるとしたら、それは現実的ではないといえる。むしろ、多様な友達と接するときの「多元的自己」とは異なる「支援者に対する作法」を学ばせたい。異議申し立てもあってよいだろう。そうすれば、「多元的自己」を説明する「統合的自己」の確立も可能になるかもしれない。教育においては、このようにして、生徒の自己内対話を深め、「自分とは何か」の追究を支援すべきと考える。

（聖徳大学教授・西村美東士）

